

倫理 I

2011 年度 夏学期

火曜日 1 限

担当教官 山本 芳久

0. あいさつ

・このシケプリは基本的には黒板と先生の話のまとめです。分かりにくいところは説明を補足した部分もあります。

・このシケプリは授業で配られた大量の資料とあわせて読まれることを想定しています。さすがにあの資料をシケプリにのせるのはつらいので、そのところは皆様よろしくお願ひします。

・山本教官は去年に東大にいらっしやったからなのか、自分がシケプリを探すのがへただからなのか、まともな過去シケプリや他クラのシケプリなどは発見できていません。

・このシケプリは0.あいさつ 1.アリストテレス 2.トマス・アクィナス 3.過去問 という構成です。

3.過去問 については山本教官は去年東大にいらっしやったため、一年分のみとなります。

・間違いなどありましたらシケタイの Y.S までご連絡ください。

・テストに関してですが、七月二十六日の九時からスタートです。

・テストの対策としては、山本教官の話によると語句説明、特定のテーマの基づく自分の考えを述べる、他の問題(外国語にも注意)から成るそうです。特に語句説明は対立・対比概念となる語句に注意とのことでした。黒板に書いていないものでも重要なものは出すと言っていました。基本的には過去問と似たような感じの問題なのだと思います。

・最後に内容は話にならなかったもの一つだけいいことが書いてあった過去シケプリがあったのでここに引用しておきます。

以上で試験対策プリントは終わりますが、ここに書かれている内容は必ずしも正しいことではありません。授業の内容とは異なっている可能性があるという点でももちろんですが、ここに書かれている内容はアリストテレスなどのある一人の人間の意見にすぎないからです。倫理という答えのない学問の世界において、人の話を聞くというのは間違いなくためになることですが、それに流されずに自分の意見をしっかりと持つということが本当に大切なことなのかもしれません。洪水のような情報にあふれかえっているこの時代において、この授業は自らの倫理的価値観を見つめなおすいい機会になったと思います。

それでは、みなさんの倫理の試験でのご武運を祈って、チェリオ！

☆では、みんなで倫理 I がんばっていきましょー！！

この授業では、アリストテレスとトマス・アクィナスについて扱う。

1. アリストテレス 『ニコマコス倫理学』

あらゆる行為すべてに目的がある。(目的の連鎖)

目的の連鎖

高校生に何故勉強するのか?と聞いてみた場合を想定して..

行為 (高校生の勉強=A)

↓ (Aすることによって)

目的 (よい大学に入る=B)

↓ (Bすることによって)

目的 (専門知を身につける=C)

↓ (Cすることによって)

目的 (よい社会人になる=D)

・ (Dすることによって)

・

・

↓

最終目的 (究極)

→ 幸福になること=最高善

→ 最高善は何かの手段になったりするものではない最終目的である。そして、それは手前にあるすべてに意義を与えている。

*A~D は目的にもなれば手段にもなる。大目的は小目的に意味・意義を与えるという連鎖が続くことになる。A~D はすべて善のひとつ。

こうしたアリストテレスの考えを目的 (幸福) 論的倫理学という。近代以降にはこれに対して義務論的倫理学が登場した。(e.g.カント)

善の多義性・価値のあることを人間は目指すが、人によって価値観は違う。

- (1) 道徳的善
- (2) 快樂的善
- (3) 有用的善

三つの生活類型

(1) 快楽的生活・安定しないため持続的な幸福を実現できない。

(2) 政治的・社会的生活(politikos bios)

↑

語源は polis

(3) 観想的生活(theoretikos bios)・この世界のあり方を考え、真理を探求する。

↑

theoria

(1)~(3)の生活のどれがよいのか？

(1)に関して:快楽とは欲求を満たすことによって生まれてくるもの。よって欲求がなくなると快楽の前提条件がなくなる。欲求は「欠如」と表裏一体である。(このことは英語の want という単語にも表れている)

→(1)では幸福を実現できない。

c.f.古代ローマ人の退廃的生活「食べるために吐き、吐くために食べる」

(1) では幸福を実現できないと考えたアリストテレスは(2)と(3)について考えた。

*幸福・自分が持っている可能性を少しでも現実化することによって生まれる充実感

学の分類

(1) 理論的学・何かについて知ること自体、理論を作ること自体が目的。必然的にそうであることを探求する。

(ex)数学、自然学、形而上学

↑

モノが存在するとはどういうことか？

動物や植物を“存在するモノ”として探求する。

(モノの抽象度を上げる)

(2) 実践的学・知ること自体が目的というわけではない。理論を活用してよい人間になる、良い政治を行うためのもの。実際に実践的場面で使う。たいていの場合そうであること(偶然的と必然的の中間ぐらいのこと)を探求する。

→個別的な状況判断が重要となる。

(ex)勇敢であること、金持ちであることが必然的によいこととは限らない。(勇敢だからといって無謀な戦いを挑み死んでしまっ
っては仕方がない)

徳(アレテー)に関する考え方

プラトン…徳とは知のことである。(悪いことをする人は自分がしていることが
悪いことだと分かっていないから、知がないからだ)

アリストテレス…知と実際の行動にはズレがある。

アレテー…働きの良さ、卓越性、力量、可能性(能力)を現実化している＝自己実現

馬のアレテー…速く走れる

ナイフのアレテー…よく切れる

virtus(ラテン語)

vir=man tus=意味を抽象化する

→徳(virtue)の語源は男らしさ、力強さ

アリストテレスの考える4つの徳

枢要徳→正義…自分のことだけでなく、他者を他者として、共同体を共同体と

して重んじる力

勇氣…困難なものに立ち向かう力

節制…自分の欲望をコントロールする力

賢慮…判断力

力…自分で自分をコントロールするのであり、他人から言われてどうこうとい

ったようなものではない。

『ニコマコス倫理学』という訳出の問題

倫理学と訳されるタ エーティカはエートス(性格・人柄)、エトス(習慣)、エーティコス(性格の)
などが変化してできたものであり、本来「性格に関わる事柄」というような意味である。(「倫
理学」というとAはしてもよいがBはしたらダメというようなきまりを作っているというよう
なイメージを抱きがちだが…)

(『ニコマコス倫理学』第二卷第一章 p.56~)

人間の性格と習慣

自然学とは……下方に落ちる石,上方へ向く火 etc 自然に存在する法則を探求す

↑ るもの

physis(ピュシス)

本性

人間本性の開放性……人間の本性は、初め開放的でいろいろなものになりうる。

(習慣によってよい方にも悪い方にもなりうる)

自然……資質がないと習慣づけても本性を変えることはできない。(下方に落ちる石、上方へ向く火 etc.)

人間→勇敢にも臆病にもなれる。(可能性の現実化)

アリストテレスの同語反復……受講者ができないことをやれと言う。活動の反復によって人の性格の状態が生まれるので、若いころからどのように習慣づけられるで大きな違いが生まれるため。

▷人間の場合、一回の行為がその人の持続的なあり方に大きな影響を与える。つまり、「A という行為を選ぶ、次回だけはまた A を選ぶ、今回だけは A を選ぶ」といったことを繰り返すうちに習慣は加速度的に身についていく。

▶以上より、簡単に定義すると、

徳 = 良い習慣 悪徳 = 悪い習慣 となる。

『ニコマコス倫理学』第二卷第一章 p.59 において、受動的な表現→「どのように習慣づけられるか」となっていることについての考察

c.f.ハイデガー『存在と時間』

被投的企投

被投的とは……「投げられてある」

→人間は気づいた時にはある集団、国の中にあるということ

ころから出発せざるをえない。(受動的)

(ex)いつの間にか地震、そして原発ヤバイ

(注)「ある」とは「存在する」という意味

企投とは……特定の状況に投げ込まれつつも、その状況の中に人間は自らを投げ込んでいく。(能動的)

(ex)GW に福島へボランティアに行く

▶被投的企投……人間は全く受動的という訳ではなく、ある程度の受動性のなかで企て、自らを投げ込む。そして微妙に自分が置かれた状況を変化させていく。→それが新たな出発点に→また新たな出発点に というプロセスを繰り返す。
→人間は受動と能動を不可分な形で結びつけながら存在している。

まとめ(アリストテレス)⇒受動的な面と能動的な面が交ざり合っている。

(『ニコマコス倫理学』第八卷第一章 p.354~)

友愛 *philia*(フィリア)について

愛されるもの=善いもの→「善」のみが愛される

☆ 愛の対象の三分類(これはアリストテレスの善の三分類と共通する)

- (1) 善きもの
- (2) 快いもの
- (3) 有用なもの

☆ 友愛成立のための三条件

- (1) 相手に善を願う=好意(エウノイア)
- (2) 相互性(相手も自分と同様の気持ちを持つこと)
- (3) 相手に自分の好意が気づかれていること(A さん、B さんが互いに好意を抱いていたとしても、気づかなければ友愛不成立)

* 愛の対象の三分類のうちどれかによって好意を抱きこの(1),(2),(3)がすべて成立した時、友愛成立

☆ 友愛の三種類(愛の対象の三分類に対応して)

- (1) 人柄のよさに基づいた友愛
- (2) 快樂に基づいた友愛

(3) 有用性に基づいた友愛

(1) 永続的で、相手の人柄全体を、人柄全体ゆえに愛している。(2)や(3)の要素がないかという
とそうではない。お互いにとって有益であり、快樂でもあるため、(2)や(3)の要素を含みこ
んでいる。Not 付帶的。

(2) ,(3)は部分的な愛。「自分にとって」快樂を与えてくれたり、役に立つ、と
いった部分を切り出して愛する。

(2)生活の共同を求める。(3)より(2)の方が本来的な友愛に近いと、アリストテレスは(2)と(3)を
区別する。

(3) 条件付きの愛である。持続性・安定性がない。生活の共有がない。

「友を通して為すことができることは我々自身が為すことができることなのである」(アリスト
テレス)

⇒アリストテレスは(2)や(3)も限界を認めつつも肯定？(と山本教官は解釈)

(『ニコマコス倫理学』第三卷第十一章 p.138~)

無抑制に関して

・アリストテレスによる人のタイプの分類

放埒な人

無感覚な人

節制ある人

抑制のない人

抑制的な人

「中庸」

中庸とは例えば・

無感覚 - 節制 - 放埒

↓

人間としての

可能性を實現

↓

欲望が強い→苦痛を伴う

=本末転倒？

しようとして

いない=非人間的

放埒な人→後悔しない。欲望と理性の葛藤がなく。欲望に完全に支配されている。必要なだけ、喜びを楽しむ。誤った楽しみ方はしていない。

⇔節制ある人

抑制のない人→後悔するが、欲望に理性が負けてしまうような人。欲望と理性の葛藤がある。

⇔抑制ある人

* 放埒な人と抑制のない人は理性が欲望に負けるという点では共通しているが、放埒な人と節制ある人は正反対である。(理性と欲望の葛藤の有無が問題)

アコラシア(放埒)

アリストテレスによれば……

倫理的に最も善い人……悪いことをしたいと思わず、倫理的によいことをしたいと思う。葛藤なく自然とそのように考え、行動するような人。

アリストテレスの思想の勘所についての考察はこのへんにして、これからは他の思想家との比較を通じてアリストテレスの思想をとらえてみる。

カント、マキャベリ、ホッブズの考え方

c.f.義務論的倫理学(Deontology)

↓

~すべき

・カント

「傾向性⇔義務」→傾向性に負けずに義務を果たすべき

ここでいう傾向性とは道徳的な好意を本能や感情に従って好きですということ。一方、義務とは普遍的にあてはまる道徳法則に従って行動すること。

カントは義務に基づいた社会を理想とする

(参考)シラーはこのようなカントの考えを批判している。シラーにとっては、たとえ本能や感情に従っても、友人を助けるような行為は「道徳的」と呼ぶことができるし、むしろ、心から真

に行為することの方が美しい精神による行為と呼べるのではないだろうか、と思われた。シラーがカント批判を行った二つの二行詩。

良心のためらい

私は友達に尽くしたいのだが、残念ながら好きでするんだ。

そこで私は思い悩む、自分は有徳じゃないだんと。

決意

しょうがない、おまえは友人を軽蔑するよう努めろ、

そして義務の命じることをしづしづ行えばいいのだ。

c.f.マキャベリ『君主論』

(『君主論』 p.45)

運命 fortuna

力量 virtu

マキャベリズム 権謀術数

○ 倫理学(よい人間としてのあり方)と政治学(よい国家の作り方)の関連

アリストテレス～マキャベリ以前までは一貫して

「倫理学は政治学の一部」という考え方があった。

しかし、マキャベリは……

「政治」と「倫理」を区別する。

よい君主=力のある君主←近代的発想

○ 君主に関する考察

君主に関する考察はマキャベリが初めてという訳ではなく、西欧文学に伝統的な『君主の鑑』という文芸ジャンルがあり、そのなかでは「よい君主=力のある君主」としている。

● マキャベリは、中世からの、君主について論じるという文芸ジャンルにのっ

とりつつも内容を大きく変えている。中世まで **virtus** は“力”という意味を持ちつつ人間を開花させる“徳”の意味で使われていた。マキャベリは“徳”の意味を **virtu** という言葉で剥ぎ取り、道徳的なものではなくもっとむきだしの“力”の意味で用いた。「政治」と「倫理」を切り離す近代的な思想である。

c.f. ホッブズ(1588~1679) 『リヴァイアサン』

(1) 「万人の万人に対する戦争」 “bellum omnium contra omnes”

(人間の自然状態) 戦争 万人の 対する 万人

力を持った人間我いれば、それを弱い者が協力して倒し、今度は生き残った者同士で争い……
というように。

(2) 「人間は人間にとって狼である」 “homo homini lupus”

人間 人間にとって 狼

(1),(2)のことから、「いつ誰に何をされるか分からない→人に暴力・力をふるう権限を皆で放棄し
よう→強大な中央政府へ権限を譲渡」というように自然状態の人間はなる。

⇒社会契約の発生

社会は人為的(人工的)=人為的(人工的)社会観

→個人ははじめから社会性を持っている訳ではない。自分の利益を最大化することを目指して生きている。みんな
そうだと conflict が生じ、誰の利益にもならない。ここから社会形成へ。

⇔一方、アリストテレスは……

「人間は自然本性的にポリス的動物である」(『政治学』)

政治的、社会的

「人間は人間にとって自然本性的に友である」(『ニコマコス倫理学』)

(他の人間に自然と親しみを感じる)

と、述べている。

(参考)ヒュームはホッブズを批判。ホッブズの理論は論理的に破綻している。なぜなら、約束を人と結び結ぶことは人間の社会性があってはじめて可能になる。社会契約は社会が成り立っていないならば不可能。よってホッブズは内的に自己矛盾している。

2. トマス・アクィナス

○スコラ哲学とは何か？(詳しい説明には大変な時間を要するので簡単に)

スコラ哲学……中世、キリスト教の影響が強い。キリスト教、ギリシア哲学が

schola(学校) 統合されたものとなっている。

神を信じる+理性でものごとを考える=スコラ哲学

信仰と理性の調和・統合

⇒アリストテレスの影響が非常に強い

伏線として、宗教改革におけるルターの考えを紹介する。(トマスの考え方とは大きく異なる)

c.f.マルティン・ルター

ルターは人間が自分の力で行為する、哲学で理性的に考えるということに対し **negative**。

○ ルターの掲げる三つのスローガン

「信仰のみ」 **sola fide**→人間は信仰のみによって救われる。Not 行為

「恩寵のみ」 **sola gratia**→人間は恩寵によってのみ救われる。Not 自由意志

「聖書のみ」 **sola scriptura**→人間は聖書によってのみ救われる。Not ギリシア

哲学(異教徒が作ったもの)

「中世のキリスト教は元来のものに他の不純なものを混ぜているので元来の姿に戻るべきだ」

(アリストテレス etc を批判することで元来の姿へ。スコラ哲学を否定。)

ルターは自由意志を否定。→人間にあるのは奴隷意志(神 or 自分の欲望の奴隷になるしかない)

c.f.エーリッヒ・フロム

ナチズムの台頭を分析。ルター的な考えとナチズムの台頭には関係があると考え。

フロムは著書『自由からの逃走』において

ナチズムの台頭には、自分が自由であることから生まれてくる不安 etc から逃れ、権威へすがるという大衆の性格が関係していると分析。(権威主義的性格)

一方ルター的な解決は→“神”に頼る。

今では神学的な言葉で考えないだけで、実際にはルター的な解決とナチズムの台頭の背景にある権威主義的性格は共通している。

⇒ドイツ思想のなかにあるルター的な発想が別の形ででてきたのが現代のナチズムである。

トマス・アクィナス(1225~1274)

師アルベルトゥス・アグヌスは 80 歳頃まで生きたので、トマスは当時としても短命だった。「キリスト教+アリストテレス」の思想を持った。

アリストテレスの著作はギリシア語で書かれていたため東西ローマ分裂等で文化水準が下がったことから、ギリシア語を読める人が少なくなったため中世までほとんど読まれていなかった。しかし、その後古代ギリシアの思想はアラビア世界に伝わり、ギリシア語からアラビア語へと翻訳された。ヨーロッパ世界には、12C にイスラーム世界から逆輸入される形で伝わり、アラビア語からラテン語へと翻訳された。その後、ギリシア語からラテン語へ翻訳されるということも起こった。

☆アリストテレス導入に対する三つの反応

(1)保守的のアウグスティヌス主義

これはアリストテレスは読む必要がなく、むしろ禁止すべきであるとする考え方である。アリストテレスの体系的な世界観、理性的な考え方がキリスト教的世界観を揺るがすと考えたためである。

⇒**信仰**に基づく考え方

(2)ラテン・アヴェロエス主義

これはアヴェロエスによるアリストテレスの注釈をもとに仮にそれがキリスト教の考えと違っていても受け入れようとする考え方である。理性的に考えて正しいのならアリストテレスの考えを受け入れるべきとする。

⇒**理性**に基づく考え方

*世界の永遠性という問題

アリストテレス→この世界は永遠の昔から永遠の未来までずっと続いているとする。世界は永遠。「種」の永遠性。『ヒトはヒトを産む』

(これは明らかに聖書と矛盾する) 個

(3)中道的アリストテレス主義

アヴェロエスとは別のやり方でアリストテレスをより正確に解釈する。トマス・アキナスが代表的。

⇒**理性**+**信仰**に基づく考え方

『神学大全』の構成方法

第一部 神論

『神学大全』第二部 人間論(倫理学)→(1)一般倫理 (2)特殊倫理

第三部 キリスト論

アリストテレスをキリスト教の中に組み込んでいる。信仰や希望を徳という視点で捉え直す。

そして、部(pars)の中は
問題 quaestio
項 articuli に分けられる。

スコラ的方法

- (1) 体系的思考
- (2) 細分化による統合→小さな問題を考えることで大きな問題に取り組める
- (3) 討論的→他の人の立場を引用する
- (4) 引用
- (5) 言葉や概念の意味を区別・場合分け

☆項の構造

- (1) 異論→自分に反対の立場を先に述べる
- (2) 反対異論→トマスの考えに近い方向の議論
- (3) 主文→「以上に答えて私はこういうべきだとする……」
- (4) 異論解答

『神学大全』序章

チェスタトン(トマスの伝記などを書いている)によれば……
トマスの世界(人間)観は”dependent independence”だという。

依存性 独立性

・トマス・アキナスの考え方

人間が固有な力(自由意志)を持てば持つほど神の力は偉大なものになる

←この根拠は、人形とロボットを作る場合を例とすると……

○Aさん(神)が人形(人間)を作る or ロボット(人間)を作る

→ロボットを作れる=ロボットは自分で動ける=すごい!

⇒人間に自由意志があるほうが神の全能性 UP!

・ルターの考え方

自由意志を否定。→人間にあるのは奴隷意志(神 or 自分の欲望の奴隷になるしかない)

←この根拠は「恩寵のみ」という考え方

さて、人間＝「神の像」という考え方は聖書『創世記』(1-26)に由来する。

神は言われた。「我々[神的一人称⇒一人であるに関わらず複数]にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」 聖書『創世記』(1-26)より

『神学大全』 第二部 第一問題 第一項 主文

異論に対してトマスは以下のように答える

・異論(二)に対して

人間的行為……理性や意思に基づき、目的を目指す。

と

人間の行為

を区別することで異論(三)を解決。

・異論(一)に対して

物事の順序(1)実現の順序

(2)意図の順序→この意味においては目的が「因」となる

(ex)高校生の勉強(詳しくはアリストテレスの一番始めのところを参照ください)

行為→目的→目的→目的→……幸福

(1)の時分は左から右へ流れる

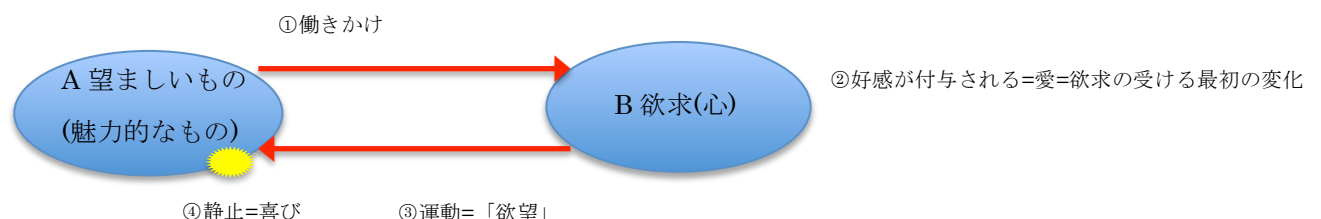
(2)の時分は右から左へ流れる ということ

『神学大全』 第二部 第二十六問題 第二項

☆愛は情念であるか

ここでのトマスの議論はこみいっているので図で整理する。

愛の運動



passion(情動、受動)→passion,passive

この二つの意味が同じラテン語で表されているのは偶然ではない。情念は外的な働きかけから思いがけず、生まれてくる。受動性と感情は強く結びついている。

passion の語源は pati(こうむる、受動する)

pathos(ギリシア)の語源は pathein(こうむる、受動する)

▷愛という感情は内発的に生まれてくるというよりは魅力的なものからの働きを受動することによって生まれてくる

c.f. 『欲求的な運動は円環状に行われる』(『デ・アニマ』アリストテレス)

愛の二面性(1)受動的に発生する

(2) 能動的な活動の原動力になる

『神学大全』 第二十七問題 第一項

異論(一)への解答 「善の観点のもとに」 sub ratione boni

下に 特質 善

⇒悪は悪そのものとしては愛されることはない

第四十八問題 第一項

「悪」 = 「善の不在」 absentia boni(善の欠如)

「悪」(ex.盲目の人、人間には鳥のように翼がないこと etc.)

「善」を部分的に蝕む→病気と健康：死んでいる人はもう病気とは言わない。死んだ時点で病気という悪はなくなる。病気は基本的に健康な人を部分的に蝕む。ひたすら「悪」というのは存在しえない。(自らが寄生しているものを無くしてしまうので) よって悪は積極的なものではない。一方、ひたすら健康というのはいえりえる。

⇒これが第一項「悪は何らかの本性であるか」という問いの意味。悪と善は対立概念のように語られるが、そこには確かな前後関係がある。善の方が優位にある。

Absentia

(1)nagatio 否定

(2)privation 欠如 の二つに分けることができる。

(1)=単にない

(2)=あるべきはずのものが不在←「悪」が「善の不在」というときはこちらの意味

第四十問題 第一項

「希望」の対象の四条件

- (1) 善であること⇔「恐れ」……悪に関わる
- (2) 未来のものであること⇔「喜び」……現在の善に関わる
- (3) 獲得困難⇔「欲望」……獲得困難という条件のない未来の善に関わる
- (4) 獲得可能⇔「絶望」……獲得可能性がない

このようにトマスは一見とりとめがなく思われる感情というものを様々な条件を入れることで区別していく。

一見正反対に思える「希望」と「絶望」も(4)の条件を入れてはじめて区別される。(「絶望」は悪に絶望するのではなく”善いもの“を獲得できないことに対して絶望する)

▶恐れや絶望は誰もあまり抱きたくない negative な感情だが、善に関わるか悪に関わるかという大きな違いがある！

第三十八問題 悲しみ、または痛苦の治療手段について

ここで、議論されることは比較的、現実的なことである。

フランスの著名な古代哲学研究者のピエール・アドの言葉で言えば。「生の技法」としての哲学というような側面もトマスは持っていたということができよう。

第三十八問題 第二項

- ①外部へ悲しみを発散させると、内的痛苦が減る。
 - ②人間の心的状態に適合するはたらきは本人にとって常に快である。
- 異論解答(二)

適合性

適合性(笑うことは喜びにふさわしい)

A 喜びをもたらすもの → B 喜びをうけるもの → 笑い

不適合、不調和

適合性(泣くことは悲しみにふさわしい)

A' 悲しみをもたらすもの → B' 悲しみを受けるもの → 泣く

果の因に対する関係は快をもたらす者と快を受ける者との関係に似ている。どちらの関係にあっても、それぞれ二項の間には適合性が見いだされるからだ。そして、似たものはすべて自らに似た相手のものを増大させる。嬉しさが笑いやその他の嬉しさのもろもろの果によって増大するのはそのためである。

よって悲しみの場合には悲しみと泣くことの適合性によって、ある種の安定が生まれることになる。つまり、泣くことは悲しみを和らげると言える。

アウグスティヌス(354~430) 『告白』

『告白』第四章においてアウグスティヌスは……

quaestio mih, factus sum

問題 自分にとって 自分が~になる

と述べる。

アウグスティヌスは十代後半から二十代後半までマニ教に傾倒する。

マニ教；

[二元論]

善い神→精神的なものを創造し、支配する。

悪い神→肉体的(肉体)なものを創造し、支配する。

マニ教では、宇宙規模で善神と悪神が闘っていると考ええる。人間の体でおこる精神と肉体の葛藤はその闘いの一舞台にすぎない。どちらが勝つかは神の闘いの結果を反映してもいる、一種の代理戦争であると考ええる。

アウグスティヌスは、『「わたし」はどこに行ってしまうのか?』という疑問を持つようになる。

キリスト教：

唯一で全能の善神が全世界(精神も肉体も)を善いものとして創造した、と考える。

若い頃のアウグスティヌスはこれでは悪の問題を説明できないではないかと考えた。

しかし、その後キリスト教の教えに共鳴していく。

キリスト教：

人間との相互交流(最も善いこと)のために神は世界を創った。

→「自由意志」があってはじめて神と人間との交流(愛)が成立する。(ここでの「自由意志」とは神と交流することを選ぶこともできれば、選ばないこともできるという自由のこと。つまり、

人間をロボットのようなものとして、もとより神を愛するように創ると、本当の意味の相互交流にならないということ)

⇒こうしたことの副産物として、人間が悪を為すという可能性が生じてくると考える。

- * キリスト教では肉体などは穢れたものと考えられているなどと誤解されがちだが、実際にはすべてはもともと神が創った善いものだと考えられている。善いものとして人間に神が与えた自由意志を与えられた人間が悪用することがあり、その際悪が生まれる。よって、悪の原因を神にもっていくことはできない。

『神学大全』 第二百二十三問題 第一項

- (1) 理性自体が正される場合→「賢慮」
- (2) 人間に関する事柄において理性の直しさが確率される場合→「正義(他者を他者として、社会を社会として重んじることのできる力)」
- (3) 直しさをもたらすのに妨げとなるものを取り除く方法→「節制」「勇氣」

●正しい判断力→他者や社会に適用→妨げとなるものを取り除くための二つの徳

⇒アリストテレス的な四つの徳を内容的には受け継ぎながらも、何故その四つの徳が重要であるのかという理由を人間の行為の分析によって明らかにしている。

アリストテレスとの対比として義務論的倫理学の代表的論客カントの思想を以下で少し見る。

カント 『実践理性批判』

第七節

bonum[ラテン](agathon[ギリシア])(善)

- (1) 道徳的善→das Gute(善)
 - (2) 快樂的善
 - (3) 有用的善
- } das Wohl(幸)

「善」を考慮するのか、「幸」を考慮するのか→全く別の価値評定

▷幸福を相対化→幸福ではなく義務が行動の指針となるべき

『神学大全』 第二十四問題 第二項

- ・ペリパトス学派……アリストテレスの学派のこと。アリストテレスは弟子たちと散歩しながら peripathein(散歩する) ら哲学について語った。
- ・ストア学派……賢者になることを目標とする。

賢者=外界の無秩序な動きから超然とし、喜んだり悲しんだりしない。

感情=外界から心を乱されるということ。外界からの災い。 とストア派では考えられた。

⇒apatheia が理想

否定 感情

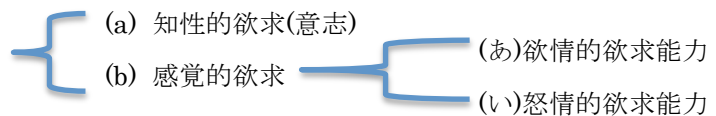
欲求(1)道理にかなった運動=意志

(2)理性の境界をはみだす運動=感情

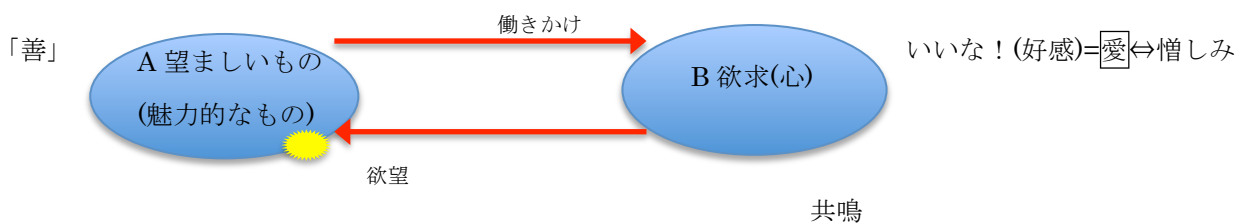
・トマス

精神(1)把握力(認識力)……外のを内へとりこむ

(2)欲求力……内から外へ向かう



The definition of passion, Formal objects of the passions, The activation of passion



ガダマー 『真理と方法』

解釈学

解釈学的循環……「全体」が分からなければ、「部分」が分からない。「部分」が分からなければ「全体」が分からない。(映画や小説を思い浮かべてみるとよい)

(参考)

解釈学的循環 (独: Hermeneutischer Zirkel、英: Hermeneutic circle) は、ディルタイ、ハイデガー、ガダマーらの解釈学における基本問題。

ディルタイは、その解釈学において、全体の理解は部分の理解に依存し、部分の理解は全体の理解に依存する、ということを指摘し、全体や部分の解釈が循環に陥ることを問題にした。

これに対し、ハイデガーはこの循環を時間性として捉え、先入見 (Vorurteil) がむしろ必要不可欠であると考えた。

ガダマーは、ハイデガーの思想を発展させつつもその時間性を排し、この循環を積極的に地平

融合として理解した。すなわち、この地平融合において、元著者のテキストと解釈者のテキストはどちらが優位ということなく融合して一体化する。この発想はその後のポスト・モダニズムの重要な契機となった。

3. 過去問(2010 年度)

山本教官は昨年、東大にいらっしゃったらしいので過去問はこれのみです。

倫理 I 試験問題

2010 年 7 月 13 日

担当教員 山本芳久

[I] 語句説明 (説明の長さは自由であるが、最低でも二・三行程度書くのが望ましい)

- ① 目的論的倫理学・義務論的倫理学
- ② 「善」の三つの意味
- ③ arete
- ④ 友愛の三種類
- ⑤ passio
- ⑥ 愛の受動性と能動性
- ⑦ 「希望」の対象の四条件
- ⑧ スコラ的方法

[II] 論述 A

講義を受けて、興味を持ったテーマの中から、各自、自分で自由にテーマを決め、講義で扱った内容に対してコメントを加えながら、論じなさい。(例:「アリストテレスの徳論について」、「トマス・アクィナスの感情論について」など)。

[I]の語句説明に列挙されているものと同じテーマを扱ってもかまわない。

評価の基準は、

- (1) 講義内容や配布したプリントに対する正確な理解に基づいていること。
- (2) 単なる要約ではなく、講義によって触発されて自分の頭で考えたことを的確に述べていること。以下のようなやり方が望ましい。(すべての条件を満たす必要はない。

一つの条件を満たせばよい。)

- (a) 批判的なコメントを加える。
- (b) 講義を受けて、自分の考えがどのように変わったのかを述べる。
- (c) 講義やテキストの内容と、自分の個人的な経験を関連させながら述べる。
- (d) 自分の専門（または関心を持っていること）と関連させながら述べる。

長さは自由。長く書きたい人には試験用紙を複数枚配布する。

[Ⅲ]論述 B

倫理学を学ぶことが、自らの人生において、または、自らの専門分野の研究において、どのような意味を持ちうるか、前期の授業全体を踏まえて述べなさい。「意味を持たない」という解答でもかまわないが、いずれにしても、その理由を筋道立てて論理的・経験的に説明しなさい。